槐（かい）

平成29年2月号

岡井省二創刊

鴛鴦

高橋将夫

山眠り返ってこない谺かな

仏の手とどかぬ背ナの煤払ふ

同じ夢児て冬眠の蛙たち

千両の赤は錯覚かもしれぬ

PDF= 俳誌の salon

日向ぼこもぬけの殻となつてをる

涸滝を見て水音を懐かしむ

木枯に火山列島縮みけり

鴛鴦の最後に残るのはどちら

北風は右顧左眄せず吹き抜ける

冬眠の蛇も目覚める改憲論

あきもせず沢庵を噛み古稀過ぎし

PDF= 俳誌の salon

槐安集

水野恒彦

見えるもの見えざるものの冬ざるる
たそがれは光陰にじむ龍の玉
墨書して山の向ふは雪降れり
芭蕉、虚子、省二、連綿と冬天に
死者の書を閉じて瞬く冬の月

加藤みき

大霜や地の中深く煮えてをり
足腰の具合こよなし年暮るる
シリウスや皆皆待ちてゐたりけり
胸に納め初冠雪の富士に会ふ
わが心に何はともあれ初灯

中島陽華

境界石はFの七竹の春
日和かな菊の上屋に雀来て
厄日かな二度目のベルも郵便夫
溝掃除忘れて村の星まつり
神無月橋杭岩の連綿と

竹内悦子

月山の麓に泊り無月かな
秋天や泣き虫の子の片笑窪
玉の緒に触れて深草辺りかな
五百羅漢拝観受付初紅葉
深草や十界曼陀羅赤のまま

PDF=俳誌の salon

雨村敏子

草ぐさの花盛りなり万華鏡
而今(にこん)いま夫の宇宙よ石蕗の花
石蕗あかり不思議の森に誘はるる
銀河系へ迷ひ込んだる穴惑ひ
枯蓮の骨の強さよ水鏡

本多俊子

夢殿をはるかにひとり菜を洗ふ
その色を心の芯に藪柑子
水のごと過ぎゆく日々や枇杷の花
夕日より深き沈黙くわりんの実
我が顔を奪はるるシリウスよ

近藤喜子

ひそやかに枯木の秘める熱きもの
ゆつくりも急ぐも独り大枯野
咲き乱る花園を冬蝶の夢
一切の空(くう)となりたる日向ぼこ
短日の極みと覗く深井かな

瀬川公馨

秋風の天地無用はなかりけり
末枯の夜な夜な流転してゐたり
美(う)ま織(こ)りを日がな一日冬紅葉
文化の日村人たちの空さはぎ
賢しらの茶の花なりきムスターシュ

PDF= 俳誌の salon

久保東海司

室咲きや包みこんだる四方の闇

絵天井龍には触れず煤拂

送行（そうあん）の袖ひるがへして下山せり

何か言ひ交して蟻のすれ違ふ

雌雄の岳離ればなれに眠りけり

柳川晋

山眠る前に伸びする朝かな

栄光の日日に連なる枯野かな

脛の傷人には非ず鎌鼬

恐竜の遺せしインフルエンザかな

しおじやけの黒眼が街を見て咲ふ

熊川暁子

衝立の奥より立てり今朝の冬

神さまはなべて鈴好き花八つ手

冬ざるる嘘をうつせぬ水鏡

近松忌死ぬほどでない恋をして

手ぶらほど重いものなし枯葉道

寺田すず江

冬嶺や虚空へ抜ける風の道

晴れやかな孤独のありぬ一葉忌

羽衣のやうな浮雲小春かな

銀杏散るひと葉ひと葉の煌めきて

晩節をなぞりて遥か霜夜かな

PDF= 俳誌の salon

岩下芳子

明るくて冷たき朝の景色かな

短日の日を吊り上げむ重機かな

踏み込んで銀杏落葉に染まりけり

冠雪の富士引き寄する遠眼鏡

短日や暮れてしまへばパラダイス

近藤紀子

朝寒や焙じ茶の香に夫のこゑ

原型をとどめぬ鶉稲荷山

秋夕焼朱色の鳥居溶けてをる

金風や草原続く雄山へと

風切羽一枚残す寒鴉

岩月優美子

双頭の鷲の威厳の生き続く

悲喜劇の狭間で舞ひし波の華

小春日やきのふと違ふ骨の音

冬紅葉最後の旅は荷を持たず

わたくしの心見透かす冬の月

竹中一花

八巻の能登の杜氏や鰤起し

網代守水の速さに雲の飛ぶ

夕空に手を振る回転木馬かな

丹田に息深く吸ふ冬の朝

念佛の終はるや大根炊き上がる

PDF= 俳誌の salon

前田美恵子

陵の前に脱ぎ置く冬帽子

笹子鳴く賽の河原に羅漢かな

炉話の御開きになる丑の刻

裸木のこぞりて枝の天を突く

錦なす樹齢の幅の落葉かな

中田禎子

秋天や天上ゆきの観覧車

騒ぎ立つおかめひよつとこ神無月

暁闇に木沓のひびく冬の水

山頂に寺のありけり大根焚

冬満月小指に光るリングかな

PDF= 俳誌の salon

槐市集

有松洋子

祈(ね)ぎ事の沁み込む社(やしろ)露時雨
祇陀林にしづかな声や冬暖
水中に虚空のありて鳰を呼ぶ
榾爆(は)ぜるさまよふ誰か来た合図
夢と消えし一句が赤きこの落葉

犬塚芳子

余生なほ通りなれたる露の径
コスモスに無念無想となつてゐし
首巻や大き落日見てをりぬ
旅空を思ふてをりぬ栗きんとん
爪弾きの琴の音色や冬ぬくし

犬塚李里子

ほんたうは人恋しくて実南天
一本の何処まで続く冬木道
箱階段登る旧家や花八ツ手
金木犀夜に入りてより芳(かぐは)しき
目を放ち心を放ち芒原

井上静子

雀語のつづいてをりぬ一茶の忌
読経する背すじ伸びたり親鸞忌
一本の松茸分かち合ふも良し
三寒四温忙しい人と暇な人
皺の手の魔法の力あたたかし

PDF= 俳誌の salon

今井充子

地震あとの因幡伯耆に冬来る
落葉掃く手に馴染みたる竹箒
俯きて釣瓶落しの気配あり
臘梅の香に佇みし朝上がり
街中に月輪熊の出没す

岩田洋子

膝を抱く五百羅漢や十二月
修行中の札かかりあり櫨紅葉
幸せは目からくるもの秋茜
息止めて糸通しをる夜長かな
考の骨真つ白なりし山眠る

江島照美

老父母のあつあつぶりや帰り花
長々と眉毛が立派木の葉髪
妊婦まで走つているよ運動会
茶の花や静かに放つ匠の美
室咲の残り香に酔ひ昇降機

岡田桃子

薮柑子保名（やすな）悲恋の語り部か
水陽炎遊ぶ庵の冬構へ
青空へ枯葉の挿頭金の四手
怪石やY字U字の紅葉川
裸木の岩山鳥の声弾く

荻布貢

漱石忌草を枕に猫眠る
神在月の砕ける波の日本海
真田丸の負けぬ戦や冬の虹
池の面の光を乱す鴨の声
草奔の志あり月冴ゆる

久保夢女

コスモスの傾ぎ面舵いつぱいに
天を誉め銀杏黄葉は地を鎮む
秋と冬分かつ結界石蕗の花
穏やかな冬始めなり薄荷飴
笑ふこと大切なりし七五三祝

PDF= 俳誌の salon

槐集

葱刻むリズムありけり四季の歌　枚方　中　貞子

決めかねて花野に遊ぶひと日かな

山眠る美しき姿や吾もまた

冬林檎光つてをりし仏間かな

冬至南瓜楽しき齢でありにける

鳥入れて冬田やさしき温度もつ　大阪　有松　洋子

竜宮をいつか見たしとかいつぶり

冬眠の蛇刻刻と透けてゆく

一葉忌路地に干しある女下駄

邪魔するな梟はいま思案中

紅葉且つ散る風音宙に返しつつ　岡崎　吉田　順子

冬薔薇終の力を天にかな

葉籠りの一途を通し龍の玉

落ちてなほもの言ふ紅や冬椿

月の森尽きしところに月の湖

高橋将夫選

牡丹焚く炎は人を狂はせる　大阪　江島　照美

デコルテを着こなす女秋惜む

人恋し家から家へ行く鼬

はじまりは嘶きからよ時代祭

藤は実に君は少女へ変はりけり

破芭蕉又いとしくて可笑しくて　竹原　久保　夢女

昨日今日明日も嬉しき山の色

野菊撫で風が運べるささめごと

またねとは何時のことなる浮寝鳥

蜜柑むき幸せつてやつ鑑みる

寒牡丹声を聞かむと屈みけり　岡崎　犬塚李里子

白鳥の頭上をふいに過ぎしもの

群青の空の彼方へ神の旅

現し世に立ち寄り惑ふ雪女郎

ふり返りみれば明るき枯野かな

PDF= 俳誌の salon

銀河往来

高橋将夫

◆槐集観照

葱刻むリズムありけり四季の歌　　中　貞子

試しに四季の歌を口ずさみながら手を動かしてみた。なるほどいけそうだ。葱を刻む作者の姿が想像されて楽しい。〈山眠る美しき姿や吾もまた〉〈冬林檎光つてをりし仏間かな〉〈冬至南瓜楽しき齢でありにける〉、どの句からも明るく、楽しい作者の精神の風景が伝わってくる。

鳥入れて冬田やさしき温度もつ　　有松　洋子

寂しく冷たい冬田の景も、鳥が入ることによってあたたかな景になる。そして、かたわらにはあたたかな作者がいるのだ。〈竜宮をいつか見たしとかいつぶり〉は夢のある一句。〈一葉忌路地に干しある女下駄〉の句にはロマンがある。〈邪魔するな梟はいま思案中〉の句、梟は知恵の象徴なのだ。

葉籠りの一途を通し龍の玉　　吉田　順子

「葉籠り」が龍の玉の様子をよく捉えている。そして、一途を通す」が龍の玉の思いを代弁している。それは作者自身の思いでもあろう。擬人法という方法論の問題ではなく、実相観入あるいは内観なのだ。精神の風景である。〈落ちてなほもの言ふ紅や冬椿〉の句もまたこと・ものの本質に迫っている。〈月の森尽きしところに月の湖〉の句では月の森と湖が美しく詠まれている。

牡丹焚く炎は人を狂はせる　　江島　照美

「牡丹焚く」は牡丹を焚いて供養する行事。「菊焚く」も季語にあるが、「人を狂はせる炎」となると、やはり牡丹。

破芭蕉又いとしくて可笑しくて　　久保　夢女

破芭蕉を「いとしい、可笑しい」と見る眼差しがまたいとしくもあり可笑しくもある。〈昨日今日明日も嬉しき山の色〉〈またねとは何時のことなる浮寝鳥〉の句もまたほほえましい。

現し世に立ち寄り迷ふ雪女郎　　犬塚李里子

白一色の雪の世界から来た雪女郎にこの濁世はどんな風に見えたのだろう。迷ってもいたしかたなかろう。

永遠の帳を破り流れ星　　藤田美耶子

宇宙は無限で永劫。そして流れ星は一瞬。「刹那永劫、永劫刹那」は省二先生の句集『鯨と犀』の口上。〈破蓮の己れ見すゑる水鏡〉と〈消えぬ火を心に灯す吾亦紅〉の句は、それぞれ「破蓮」と「吾亦紅」の本質に迫っている。〈黄落を舞台としたりギター弾き〉の句の、「黄落を舞台にする」という視点は作者ならではのもの。

〈以下略〉

PDF= 俳誌の salon